

平成 30 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

多世代交流・共生のまちづくり

調査地：デンマーク ヘルシンゲル市

調査日：平成 30 年 10 月 3 日～11 日

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 移住・交流推進課

谷田 由香

目 次

1	はじめに	P.1
2	名寄市の現況と課題	
	(1)名寄市の現況	P.1
	(2) 名寄市の課題	
	①高齢者取り巻く環境	P.2
	②子育て環境	P.3
	(3) 名寄市の取組	P.3
3	デンマークの取組	
	(1)デンマークの概要	P.4
	(2) コウハウジングについて	
	(3)ヘルシンゲル市 コウハウジング「Bakken」	P.5
4	まとめ	P.8
5	おわりに	P.9

1 はじめに

現在の日本は先進国として成熟社会を迎え、少子高齢化が急激に進むとともに個人の価値観が多様化し、地域住民間の付き合いや助け合いという家族や地域で相互に助け合う機能が失われてきている。その結果、自殺や孤独死、虐待や介護を原因とした事件・事故といった社会問題が生じている。

また、今後一層進むと予想される少子高齢化や生産年齢人口の減少といった人口構造の変化により、社会保障負担が年々増加するにも関わらず、それを支える世代が大幅に減少してしまうという可能性が高い。

さらに、女性の社会進出が進む一方で、家事や育児の分担はまだ十分に進んでいないため、母親が子育てと仕事の両立に悩み相談相手や助けてくれる相手も見つからず鬱やノイローゼなどになるケースも少なくない。核家族化や女性の社会進出に伴い共働きが増加した現代における介護や子育ては、社会全体が抱える問題として皆で相互に支え合う必要がある。

人口減少時代に社会が抱える課題は多様かつ複雑なものになっている。単純な課題は縦割りの取組で解決できたが、多様かつ複雑な課題に対しては分野横断的な対応が必要となる。また、サービスを「提供される側」だった住民が、今後はサービスを「供給する側」の役割を担う市民相互の補完も求められている。

そこで、多世代交流・共生を強化することが、互助や相互理解、高齢者や子どもを取り巻く現代社会の課題解決や地域コミュニティの再生に繋がり地域の持続可能性を確保するきっかけになるのではないかという仮説を立て、調査を実施した。

2 名寄市の現況と課題

(1)名寄市の現況

名寄市は、北海道北部の名寄盆地の中央に位置する、農業が主要産業の田園都市である。24 時間体制の小児科が設置された市立総合病院、市内循環バス、市立の 4 年制大学、日本で 2 番目に大きな望遠鏡を設置した天文台など、特徴ある施設を備えたまちでもある。自然豊かな生活環境や文化施設などの活動拠点に恵まれ、様々な市民活動が行われているが、人口は、昭和 43 年(1968)の 39,037 人をピークに減少が続いており、平成 31 年(2019)2 月 28 日現在では 27,542 人¹となっている。平成 27 年(2015)の国勢調査では、前回の平成 22 年(2010)の 30,591 人から 29,060 人へと 1,531 人減少（減少率 5.0%）している。

¹ 名寄市「住民基本台帳月末人口」

(2) 名寄市の課題

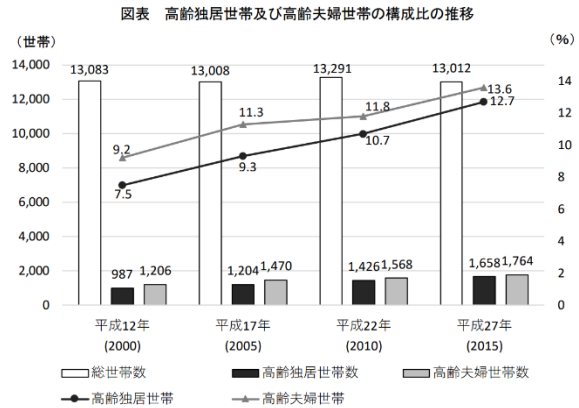
① 高齢者を取り巻く環境

平成 27 年 (2015) に 30.5% だった高齢化率は、平成 37 年 (2025) には 33.4% に上昇し、認知症高齢者や一人暮らし高齢者、高齢者のみの世帯が増加していくと見込まれている。総世帯数に対する高齢独居世帯の構成比は、平成 12 年 (2000) の 7.5% から年々上昇し、平成 27 年 (2015) に 12.7% となっている。高齢夫婦世帯の構成比も平成 12 年 (2000) の 9.2% から平成 27 年 (2015) に 13.6% に上昇し、さらに上昇するものと推測される。高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自立した生活を営むことがで

きるよう、医療、介護、介護予防、住まい及び日常生活の支援が包括的に確保される地域包括ケアシステムを段階的に構築し、安心して健やかに暮らせるまちづくりが急務である。

また、平成 22 年 (2010) 国勢調査によると後期高齢者 (75 歳以上) は、男女ともに転出超過で、特に札幌市、旭川市への転出が多く、施設や病院、または家族の元へ転出しているものと考えられる。冬季は除雪困難なため、自宅にひきこもりがちになる高齢者も多く、日照時間の少なさからうつ病の発生率が高く、自殺率が高いのが現状である。

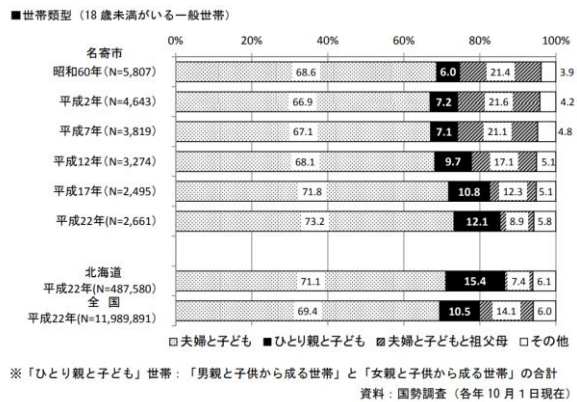
平成 29 年 (2017) 11 月に医療と介護の専門職及び高齢者等を対象に「どんな名寄だったら最後まで暮らし続けられるか」をテーマに実施したワークショップでは「通院や買物などのために便利な交通手段が必要である」「病気になった時に困らないために医療及び在宅医療が必要である」「冬期間の除雪など支援が必要である」「高齢者の集合住宅や介護施設の充実が必要である」などの課題が出された。高齢者が住み慣れた地域で自立した生活を続けることができるよう、高齢者の住まいのかたちとして、互助、互助の考えを広めていく必要がある。



		平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成22年 (2010)	平成27年 (2015)
総世帯数	(世帯)	13,083	13,008	13,291	13,012
高齢独居世帯数	(世帯)	987	1,204	1,426	1,658
高齢夫婦世帯数	(世帯)	1,206	1,470	1,568	1,764
高齢独居世帯	(%)	7.5	9.3	10.7	12.7
高齢夫婦世帯	(%)	9.2	11.3	11.8	13.6

②子ども・子育てを取り巻く環境

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、年少人口は2015年(平成27年)の3,601人から、2040年には2,642人と、26.6%減少すると見込まれており、今後さらに減少傾向が続いていくことが予想される。核家族化の増加も深刻である。18歳未満の家族がいる一般世帯の世帯類型をみると、平成7年以降は、「夫婦と子どもと祖父母」の割合が低下し、「夫婦と子ども」、「ひとり親と子ども」割合は共に上昇している。一人っ子の家庭が増え、近所の子どもは減り、異世代の子どもの付き合いは減少し、子ども時代に学ぶべき対人能力が養えない子どもが増えているのではないかな。核家族が増加する、中、男性は仕事に追われ、家事や育児を女性が担ってきた。女性の社会進出は進みつつあるが、仕事をしながら家事や育児をこなすことは並大抵のことではない。このような問題を家族だけで抱え、誰かに相談もできず孤立する家族が生まれないよう、地域で共に子どもを育てる仕組みが必要である。



(3)名寄市の取組

名寄市では住民参加型在宅福祉サービス「ほのぼの倶楽部」事業²を実施している。これは、「こんな援助（サービス）があれば助かる」「こんなことであればお手伝いできる」という住民の想いや感情を大切にしながら相互援助システムとして体系化し、日常的な家事援助等をはじめ、自分たちが必要とするサービスを自らつくりあげ、会員相互で提供しあい、家庭生活の安定を図ることを目的に生まれたものである。

また、子育て援助活動支援に特化したサービスとして平成28年（2016）4月からファミリー・サポート・センター事業³が開始された。これは、急な残業等の際のによる保育所への送迎や、子どもの病気等の緊急時の保育に対応するため、相互に契約した会員組織による育児の相互援助活動として、子育てのお手伝い・手助けを希望する利用会員と子育てを手助け・応援をしたい人とのマッチングを有償で行うものがある。

どちらのサービスも登録者、利用者ともに年々増加しており、互助、共助の考えが徐々に広がり始めている。このような中で、デンマークでの取組を参考に名寄市における多世代交流・共生のまちづくりについて考えていきたい。

² 登録者数30名（提供者：8名、利用者：22名） 平成29年度実績

³ 登録者数168名（提供者：130名、利用者：22名、両方登録：16名） 平成29年度実績

3 デンマークの取組

(1) デンマークの概要

正式国名はデンマーク王国、民主憲法に基づく立憲君主国で、言わずと知れた福祉国家である。本土面積は約 43,093 平方キロメートルで日本の約 8 分の 1、九州よりもやや大きい程度である。本土の北端から南端までは約 360 キロ、西端から東端まで約 400 キロで、数時間のドライブで容易に縦横断することが可能である。地形的には国全体に平地が多く、ゆるやかな起伏の丘が広がっている。この平らな地形



▲アンデルセンが愛したカラフルで可愛いらしい街「ニューハウン」

は、階級を好まず平等精神を尊ぶデンマーク人の国民性に大きな影響を与えている 1 つの要因とも言われている。

オランダのロッテルダムにあるエラスムス大学の教授が行った幸福度世界ランキング⁴では、2013 年（平成 25 年）、2014 年（平成 26 年）、2016 年（平成 28 年）に世界 1 位に輝き、「世界一幸福な国」とされている。一人当たり名目 GDP 10 位⁵、法律でフルタイムの仕事は週に 37 時間労働と定められており、経済成長とワークライフバランスを両立させてきた国である。

また、高負担高福祉の代表的国家であり、税については消費税が OECD 諸国の中で 3 番目に高い税率 25%、所得税（住民税など含む）は最高税率が 68%、さらに自動車登録税の税率が 150%であり、国民負担率が 65.8%と極めて高い水準である一方、医療費や出産に要する費用が無料であり、充実した年金制度などから国民は納得して納税していると言える。地方議員は普段自分の仕事を有し、議員活動は無償で、かつ汚職が少ないことなどから政治に対する信頼感も高い。

教育費は大学院まで無料であり、「フォルケホイスコーレ」といわれる成人教育機関が整備されているなど、教育制度も充実していると言える。「フォルケホイスコーレ」

⁴ 「所得」「健康と寿命」「社会支援」「自由」「信頼」「寛容さ」などの要素を基準にランク付け。2018 年（平成 30 年）は日本 54 位。

⁵ デンマーク：56,630.60 ドルで 10 位。日本：38,448.57 ドルで 25 位。2018 年（平成 30 年）10 月 17 日時点。

は、17 歳半以上であれば国籍・人種・宗教を問わず誰でも入学でき、自分自身や人生を立ち止まって考え直すための人生の学校であるといえる。デンマークでは、どんな子どもにも平等にチャンスがあるべきと考えられており、親がどんなに貧困であろうと、子どもが希望すれば学べる環境が整っている。

小さな国だからこそ、少ない資源、少ない人口を前提とすることが必要であるため、人が一番の資源だと位置づけ、きめ細やかな社会保障という安全ネットを張り、見捨てられる人を出さない政策を展開している。多くの国民が、「自分の人生を自分で決定すること」を願い、常に自分らしい人生を築くことを真剣に考えていると言う。この国民性の根源は「自立」した人間像にあり、血縁関係に頼らず個人の暮らしを尊重した後述のコウハウジングという住まい方が広まった大きな要因とも言える。

(2)コウハウジングについて

新たな共生の形として「コウハウジング」という住まい方がある。コウハウジングは、1960 年半ばにデンマークで考案された住まい方である。当時、近隣関係が希薄となっていた都市部で、仕事と子育ての両立に悩んでいた共働きの夫婦により考案され、現在はスウェーデンやアメリカなどにも広がっている。近年では、エコロジーやシニア世代の居住など、その目的は多様化しつつある。

この住まい方の特徴は、個人の住まいの独立性とコミュニティの良さを合わせ持ち、互いに協力して暮らしていくところにある。

コウハウジングが普及してきた背景には、少子化問題、子どもを持つ女性の就労問題、近隣関係の希薄化などがあり、多くのコウハウジングでは共有スペースを利用して居住者たちが共同で子育てや料理を行い、共に食事を取りコミュニケーションを密にしている。

コウハウジング建設にあたっては、このような住まい方に興味を持った入居予定者がグループを形成して建設するケースやディベロッパーが入居者を募集して建設するケースがある。本調査では入居予定者でグループを形成し建設されたヘルシンゲル市のコウハウジング「Bakken」を調査した。

(3)ヘルシンゲル市 コウハウジング「Bakken」

①実地調査

a. 概要

ヘルシンゲル市は、首都コペンハーゲンから電車で約1 時間の場所に位置している。この市のコウハウジングは、入居予定者がグループを形成した後、募集チラシの配布や新聞広告により興味を持つ人を集め、コンセプトについての合意経営が行われた上で建設され、1980 年に入居が始まった。現在、分譲形式で戸建て 25 棟、共同スペースの 2 戸の、計 27 世帯が入居している。当初は若い世代の入居が多かったが、入居者の入れ

替わりにより現在は若い世代から高齢者まで様々な世代が入居している。



▲コウハウジング「Bakken」 敷地内



▲共同の台所、食堂などがある「コモンハウス」

b. 互いの役割

共有のコモンハウス⁶には、台所、ダイニング、洗濯室、プレイルームなどがあり、家事やコミュニティの仕事を分担している。高齢者や子どもは負担が軽減されるようになっているが、彼らが担える範囲で関わっているそうである。どの世代にも担える役割があり、その役割があることが生きがいに繋がっているとのことである。日中は多くの親たちが働きに出ているため、学校から帰った子ども達の見守りは仕事をリタイアしたシニア世代が担っている。自分たちの子どもが独立してしまった世代にとっては、子どもと関わることが生きがいにも繋がっているのであろう。兄弟がいない子どもも多いが、たくさん子どもたちの中で暮らすことで、年上の子ども達は小さい子どもの面倒を自然に見るようになる。なお、洗濯機や子ども達が遊ぶプレイルームは、コモンハウスに共同で使用するものとして設置されているため、基本的に各住宅にはない。

居住者の役割分担は日常生活以外にもあり、大晦日のお祝いやクリスマスパーティなどのイベントを共に作り楽しんでいる。

また、部活動のような小さなグループも作られており、馬や羊などの動物の面倒を見るグループや養蜂のグループ、小説を書くグループなどがある。子ども達にとっては、動物の世話をすることで命の大切さを学び、また、大人と共に活動することで幼い頃から多世代との交流、対人協調能力を身に着けることができる。何かやりたいと思った時に近くに一緒にできる仲間がいることはこの暮らしの特徴である。

⁶ 居住者が自由に出入り可能な、居住者同士の交流や憩いの場



▲共同の洗濯室



▲子どもたちが遊ぶプレイルーム

c. コミュニティ

コウハウジングには運営委員会があり、毎月、運営方針についての協議の場を設けている。何か問題が起こった場合には、運営委員会の中で問題が共有され、委員会での話し合いにより解決できる問題か、全住民会議に諮るべきかを判断する。コウハウジングの運営に居住者が自分事として関わってもらうため、問題の多くは何度か全住民会議に諮る。これは、ただ共に生活をするだけの場ではなく、コミュニティとしての機能も重要とされているからだと言える。その場には子どもも関わっており、多くの問題について大人と真剣に話し解決過程に関わることで社会に求められる自立した人間としての成長に繋がっている。入居者は一つの大きな家族のようなもので、子ども達にとっては話し相手になってくれる大人や世話をしてくれる大人がいて、両親以外の人たちから注意を受けることもある。子どもを入居者みんなの手で育てる緩やかなシステムが成立している。

d. 共通認識

現在は100世帯近くが入居待ちとなっている。住宅に空きが出た場合には、運営委員会で入居待ちリストから入居世帯を選定し、実際にコウハウジング内を見学してもらい、共同の食堂で食事を取るなどして入居の判断をしてもらうそうである。分譲形式だが住宅から1歩外へ出ると共有スペースであるため、入居希望者にはここでのルールを説明し理解してもらうことが重要である。コウハウジングに暮らすということは必然的に他人との距離感が近くなるが、コミュニティとプライベートを切り分けることも大切にしている。例えば住宅に鍵がかかっている場合には邪魔をしない、共有スペースで何かする場合に集うことを強要しないなど、他人との価値観の違いや多様な入居者がいることを皆が理解している。

e. 自治体によるコウハウジング建設

近年、デンマークでは自治体が主導しコウハウジングを建設する例も増えている。コ

ウハウジングに暮らす人は、自分が持つ能力を活かしたい、役割を担うことに対して前向きで意欲的な人が多いため、地域にも良い影響をもたらすと認識されている。このような暮らしで人を惹きつけ活性化している自治体もあるという。自治体が主導する場合でも、入居者が建設段階から関わることが重要だとのことである。その理由は、家事や育児の助け合いや自分達で住まいを作っていくところに面白さがあり、集まって暮らすことのメリット、長く住み続けるために入居者同士で深く話し合いその上で建設することが必要だからである。



▲居住者の住宅（外観）



▲居住者の住宅（内観）

5 まとめ

コウハウジングでの生活を選択する理由として、まず子育て環境の良さが挙げられる。コウハウジングでの子育ては子ども自身にとって大きな意味を持つ。共用のプレイルームや自宅スペースで気心知れた大人達が見守りを行うことは、子ども達にとって安全で安心な空間を意味し、安全な遊び場の確保が可能となる。

また、子どもの成長過程にも大きく影響する。コウハウジングには多様な世代や多様な背景を持つ居住者が共同で子育てにあたっており、子ども達はそのような環境の中で日常生活を送ることにより、自分とは異なる背景を持つ人への理解を深めることができる。つまり、多様性を受け入れる力が自然と身に付くのである。

また、全住民会議に子ども達も参加することで、議論することを学ぶと同時に責任感を持たせることができる。幼い頃から人と議論することや相手を受け入れることを学ぶことにより社会性を身に付け、自立した大人へと成長することができる。

さらに、大人にとっても大きな意味がある。子どもを持つ親にとって共同して子育てをすることは家事・育児の負担の軽減に繋がる。また、学童保育に通う金銭的なコストや施設への送迎といった時間的なコストを節約することができる。こうした日常生活における家事・育児負担の軽減は、フルタイムの共働きを続ける上で欠かせない。子ども

を持たないシニア世代にとっても、子ども達と交流の機会を持つことができるだけでなく、これまでの経験や能力を活かすことができ、生きがいにつながっている。

このように他人と共同して子育てをすることが可能になった背景には、居住者間で信頼関係が築かれてきたことが挙げられる。ほとんどの居住者が日中は自宅の鍵をかけておらず、他の居住者が自由に出入りすることがある一方で、鍵がかかっている場合には執拗に介入しないなど、ルールが決められており居住者全員がそのルールを大切にしている。こうした信頼関係があるからこそ、自分の子どもの世話を他人に託すことができるのだろう。

また、コウハウジングでの住まいは環境負荷の低減やエネルギー使用量の削減にもつながる。資源の枯渇や気候変動、生物多様性の破壊などを防ぐには、小規模なコミュニティで住居や資源などを他者と共用しながら暮らすライフスタイルが有効である。居住や資源などを共用することで節約した資金や時間を余暇活動にあてることにより人生が豊かになるという好循環が生まれている。

コウハウジングでは、助ける、助けられるという縦の関係性ではなく、互いが役割を担い協力し合うという横の関係が成立することにより心の安定、豊かさをもたらしていると感じた。このような関係がより強固なものになることが、「このまちに住んでよかった」と思える、安心して健やかに暮らせるまちづくりにつながるのではないか。様々な世代が多様な課題を抱える現代社会の中で、互いの強みや担える役割に応じてそれらを繋ぎ合わせていくことが行政として必要なのではないかと考える。このような役割を担う上で、重要となるのは行政の横の連携である。それぞれの領域・所管の課題を横断的につなぎ、部署を問わず経験や技術、手法などを組み合わせることで、より大きな効果が生まれるのではないだろうか。

近年、日本では公共施設整備で、複数の施設の併設や既存施設の一部他用途への転用の事例が増加している。例えば、デイサービスセンターと保育園など、高齢者福祉施設と子育て施設の併設は、既存施設の有効活用、共同利用としてのメリットのみならず多世代交流を促進する重要な効果を発揮すると考える。

少子高齢化の進行により、介護や子育て支援のニーズがさらに増加することが見込まれる。一方で、社会を支える若者の数は減少していく。地域の様々な課題にこれまでのような行政サービスで対応することに限界を迎えるであろう現代社会では、できるだけ多くの場で世代間の交流を促進させて地域力を強化していくことが必要不可欠である。

6 おわりに

今回の調査にあたり、快く視察を受け入れていただき、コウハウジング案内やご自身の暮らしぶりについても教えてくださいましたリーネ・ビンド氏、そして、視察地コーディネーターや現地案内、日本とデンマークどちらも知る立場として多くの気付きを与えてく

れたデンマーク在住ジャーナリスト ニールセン北村朋子氏など関係者すべてに心から感謝申し上げ、結びとしたい。

【参考文献・資料】

- ・名寄市「住民基本台帳」2月末人口

(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/shimin/vdh2d10000003tph.html>)

- ・国勢調査(名寄市) (<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/index.html>)

- ・名寄市まち・ひと・しごと創生総合戦略

(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/kikaku/prkeql000000c3pf.html>)

- ・名寄市子ども・子育て支援事業計画

(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/kodomo/prkeql000000gsu1.html>)

- ・名寄市第7期高齢者保健医療福祉計画・介護保険事業計画

(<http://www.city.nayoro.lg.jp/mobile/section/kourei/prkeql000000bx8j.html>)

- ・世界の一人当たりの名目 GDP (US ドル) ランキング

(http://ecodb.net/ranking/imf_ngdpdpc.html)

- ・幼老複合施設における異世代交流の取り組み（福祉社会における幼老共生ケアの可能性）、第一生命経済研究所 研究開発室 北村 安樹子

- ・『デンマークの子育て・人育ち「人が資源」の福祉社会』澤渡夏代ブランド著、大月書店、2005年

- ・『コウハウジング 欲しかったこんな暮らし!子育て、安心、支え合う仲間たち…アメリカの新しい住まいづくり』コウハウジング研究会、チャールズ・デュレ、キャサリン・マッカ